



平成 29 年 10 月 24 日

平成 29 年度伊豆市議会第一委員会 行政視察報告書

杉山 武司

1. 視察日程

平成 29 年 10 月 10 日（火）～10 月 12 日（木） 2 泊 3 日

2. 視察先と目的

- (1) 10 月 10 日 熊本県山鹿市
 - ・歌舞伎小屋「八千代座」の観光活用について
 - ・中心市街地大衆浴場「さくら湯」の復興
- (2) 10 月 11 日 熊本県南阿蘇村黒川地区・高野台地区、阿蘇市、熊本市
 - ・南阿蘇村黒川の阿蘇大橋の崩落現場視察
 - ・熊本市の地震被害状況及び復旧・復旧について
 - ・現地視察
- (2) 10 月 12 日 熊本県益城町
 - ・益城町の地震被害状況及び復旧・復旧について
 - ・災害時の益城町議会の対応
 - ・現地視察

3. 視察内容

- (1) 平成 17 年 1 月に 1 市 4 町が合併した山鹿市は熊本県の北部に位置し、北は福岡や大分県に接しています。熊本を起点に北上する参勤交代路、山鹿を経て豊前・小倉に至る豊前街道を中心に栄えた宿場町です。

江戸幕府第 13 代将軍の御台所となった篤姫もこの山鹿を通ったとのことです。山鹿市の概要は総面積凡そ 300km²、人口は平成 28 年で 51,753 人、平成 27 年の観光入込数は凡そ 404 万人、内宿泊数は 284,659 人です。

主な観光施設としては、八千代座・さくら湯・山鹿灯籠民芸館があり、八千代座は明治 43 年に地元の有志が組合を設立して株を募り建てられた観客席 600 人の芝居小屋です。100 年を超える歴史を経た中であっては、庶民の娯楽の変遷により閉館の憂き目にあいましたが、地元の住民の募金活動が実り復活をし、現在では週に 6 回の山鹿灯籠踊り定期公演が開催されています。

本格歌舞伎の公演も行われ、本年は 10 月 12 日から 14 日の間は市川海老蔵公演、10 月 30 日から 11 月 5 日の間は坂東玉三郎の公演が行われます。

さくら湯は江戸時代の肥後初代藩主細川忠利の御茶屋として始まり、明治31年に「道後温泉」の棟梁・坂本又八郎氏を招いて改修、その後解体されましたが市民の思いが行政を動かし、建築費用の一部の寄付を募り工事費約9億円、再建当時の道後温泉本館そっくりの木造建物が平成24年11月23日オープン。年間の利用者は約17万人。

敷地内には市川海老蔵と娘の堀越麗禾ちゃんの八千代座公演の記念樹が植樹されていました。

山鹿灯籠まつりは、毎年8月15日～16日行われ頭上に灯籠をのせた女性が優雅に踊る「千人灯籠踊り」は圧巻だそうです。

(2) 翌11日に南阿蘇村黒川の阿蘇大橋の崩落現場視察をしました。

地震の前にこの地を訪れた時は豊肥本線に並走する国道57号線を通って阿蘇へ直接行くことができました。地震後の昨年8月に来たときには、北側の山道を大きく迂回しなければ阿蘇へ行くことはできませんでしたが、今回は8月17日阿蘇長陽大橋が再開通したため、時間が大幅に短縮されました。

この道を通り東海大学の阿蘇キャンパス側から阿蘇大橋の崩落現場にてガイドの方から地震時の阿蘇大橋の街路灯がVの字になって谷に吸い込まれていく崩落の目撃談を伺いました。車で避難し近郊のコンビニの駐車場で車中泊を決めこんでいた時に2回目の震度7が起きました。駐車場で崩落を始めているのに、体が委縮し車から出なければと思っても車外に出ることができずにいた母子を助けたのは、東海大学の学生さんとのことでした。

目の前の高い山の頂上付近から道路と線路を全て飲み込み、川まで崩落している現場に立って初めて、この谷一帯の崩落の巨大さに驚愕しました。

その後、予定には無かった南阿蘇村河陽地区の高野台分譲地の土砂災害の現場に向かいました。平成28年4月16日の本震により、高野分譲地周辺において大規模な地すべりが発生いたしました。崩壊の規模は、幅100m、長さ370m。これにより、4軒が土砂に押し流され5名の方がお亡くなりになりました。家屋などは撤去されているものの、被害当時の痕跡を残す無残な車は残されていました。黒川の阿蘇大橋の崩落はテレビ等で大きく報道されましたが、通信網が壊滅的で、この地区の家々がこのような被災を被っているとは誰も思わず、そのため救出が大幅に遅れたようです。

その後阿蘇市に向かい、阿蘇神社を視察致しました。重要文化財の楼門が倒壊さらに拝殿も倒壊し三つの神殿も大きな被害を受けましたが、使える部材を利用した、10年余の年月をかけた再建がすでに始まっていました。

この日、南阿蘇村に向かう前に有志で朝6時にホテルを出発し、タクシーで熊本城の被害と復旧状況の視察をしました。唯一行くことができる本丸の横にある加藤清正公を祀っている加藤神社に向かい本丸を目にしました。熊本城本丸は平成31年の完成を目途に復旧工事を進めています。

お城を一周して被害現場を目の当たりすると、被害箇所の多さに驚きます。タクシーの乗務員の好意により鉄筋コンクリート7階建てのマンションの崩壊した現場を案内されました。多くの建物は撤去が進む中、お城からそうは遠くない住宅地で一階部分に潰れた車が残り、地震後のそのままの状態に残っているのは恐ろしくも感じました。

阿蘇地方の視察の後、熊本市庁舎で熊本市議会事務局長の挨拶の後、復興総室から熊本地震の概要の説明がありました。

地震回数の特徴は、震度7の地震が立て続けに2回発生は観測史上初、震度6弱以上が7回発生、これも観測史上初、震度1以上の余震は15日間で3,024回、これは阪神・淡路大震災の13倍以上、新潟中越地震の4倍以上だそうです。熊本市全体での被害額の総額は、1兆6千362億9千万円、被災家屋の解体撤去申請件数は13,629件、住宅被害の応急修理は23,051件、義援金は平成29年8月31日現在、約300億円。このうち熊本城の復旧支援金は17億5千600万円。

避難から復興、そして74万人が総力を上げ明日を見据えた復興を目指していますとの説明がありました。

- (3) 翌12日に益城町役場に向かいました。益城町は熊本市の東に位置し、町内には阿蘇くまもと空港や再春館製薬所の本社があり、面積約66km²、人口33,000人余で熊本市のベッドタウンとして人口は年々増加していましたが地震後減少に転じました。

昨年の8月義援金を届けに行った時には道路の左右には潰れた家々が延々と連なっていました。今回はほとんどが撤去されていました。仮設の庁舎のプレハブ建物の議場にて議会事務局長と市議会議長から説明を受けました。天城連邦太鼓が義援金を益城町に送り何回か連絡を取っていたためか、丁寧で詳細な説明でした。

今回の地震は一切想定しておらず、全てが想定外であったようです。町の職員は、自分の家が被災しているにも関わらず80～90%の職員が登庁、役所の機能がほぼ正常に戻るのに2か月を要したとのことでした。

消防団の活躍が目立ち、地の利が利いたためガスの元栓を閉めに回ったことも二次災害の防止に役立った要因のようです。電話、携帯、防災無線などの全ての情報網が寸断、平常時から複数の情報伝達手段を備えた方がベストとの説明でした。

マスコミ対策には統一基準を策定し窓口の一本化を図る必要がある。住民のプライバシーの保護のため被災者が映像に映ることの無いようすることや、過大な報道防止のための策として有効。公的避難場所で職員は、2交代制で毎日14時間勤務、20人態勢で300人が必要だったようです。

他の自治体からの応援者は地の利がないため、専ら雑用業務のトイレの清掃、ゴミの分別、駐車場の整理などを担ったようです。

益城の住民は地元愛が強く、地元を離れることなく公的避難所付近での車中泊を選択する人が多かったようです。

議員は公的避難所を回ったが最初の罵声が回数を重ねるごとにお礼に代わってきたそうです。議員の見える化の行動として区長と一緒に公的避難所で必要な救援物資の受け取りや、63か所の公民館に各々仮設トイレ2基を届けたそうです。避難救援物資では500mlペットボトルの水、生理用品、体を拭く洗浄綿、サイズの異なる紙おむつなどが重宝する。仮設住宅は買い物が不便、周りが暗い等の苦情が多い、住民が安心できる環境を整える必要性を感じた。今後は自主防災組織の設置と訓練が必要となるとしています。

町全体で1,400億円の被害、国等の補助金は約300億円、補助率の嵩上げを要望している。町の平時の一般会計予算は100億円余それが29年度は392億円余に増額されている。単年度290億円程が復興に使われる。増額のもっとも多額の財源は 町債98億円。

震災の復興には「住民の声・想い」を大事にした復興計画を策定推進し、『なんでもない毎日が宝もの』の姿を取り戻すため復旧・復興に全力で取り組んでいます。

被災を経験した人の体験談は大いに参考になります。災害を受けた住民に対する議会、議員の行動は何をすべきか、住民のために何が最善かを考えさせられました。